

立春

泉鏡花作

—

「父様、母様、私は今日から十八になりました。」
思はず雪に手を支いたが　ー　と兩親の無い人
は私に語った。

山の中で、掌が竝んで雪の上に印された。雪には
限らず、泥にでも、這麼跡が着くと、其手を魔が曳
いて導く、と聞いたから、袂で消して衝と立つて、
遙に、眞白な谷の向うの峰の方を仰ぐ。

毎年元日、祖父の墓に参詣するのが父の例であつた。一昨年、其の亡つた後、私が代つたので、父も母も同一處に葬つてある。

墓と思ふ處の、少し小高く見えたのは、氣の所爲であらう。山は唯雪で、あたりに生きたものは何もない。

麓から、此處に来る間に、出逢つたものは、唯一頭の瘦せた犬で、奥山の雪が日に日に深くなるに従つて、恰も洪水の力で、巨大な石が川上を流れて来るやう、狼が一ツづつ、次第に里近く押出されると言ふことを聽いて居たので、可恐かつたから、其の毛色も見なかつた。が、立縮んだ傍を通つて、路を除けて、西の方、天神山の森の方へ、弓形に大きく雪の上を駆けて行つた。

見返りもしないで走つて來たが、人の足跡は其處から二筋に分れて居て、一筋は麓の方へ、一筋は森ある方へ。……見返れば又それから此處まで、

一筋、飛々に、草鞋で踏んで来た足跡が、果しなく
續いてゐるが、身の周囲のは大きく入亂れて、艮離
れたのは正しく片足づゝ入違ひに、雪は刻々な角を
立てゝ窪んで居る。遠くは唯一筋、白い絲。

心寂しいので、又墓の方に向つて御名を唱へた。
 其の墓を、二町ばかり隔つたところに、峰の堂が
 一つある。

爺の堂守が、其の子の嫁と二人で籠つて居るが、
 元日の此の墓參の時に限らず、盂蘭盆、又祥月命日
 などに登山の都度、堂に寄つて懃ふのが例で、爺は、
 山男、狼、猿、兎、木靈などの、怪しく、奇しく、
 珍しい話をしてくれる。……嫁は餅を炙つて
 くれた。粟を剥いてくれた。……可懐い。冷
 い足袋を脱がせて貰つて、早く爐の縁へ、と思つて
 来たのに、丁ど目の前五六間の處、山懐の峠路が、
 上の峰から、一雪崩に谷の底まで降積つて、爪尖を
 懸ける凸凹もなく、團栗の枝の朶もないので一足も
 進まれなかつたのである。

あはれ、堂に籠つて此雪に埋るゝ二人。爐のある
 次の間に何時も私を通してくれる、那の六疊の南の
 小窓一つ開けても見よ。雪の山に、四角な黒い穴が

開いて、嫁の美しい顔が覗くであらうのに、と思ふ
時、ふと其の六疊の間の紙で貼った天井の渦巻の
ことが胸に浮んだ。墨繪の渦巻は、なにがしの繪師
が描いたといふ、手拭に濃い墨を絞るばかりに含ま
せた一筆で、打附けた、其の筆を起した處が、龍の
頭の形になつて、勢餘る墨の飛沫は、其處とも分か
ず、一面に迸り、猛然として凄じい。下の疊はいつ
も青々と綺麗な、我も人も馴染の一室。

然し峰の堂の天井の渦巻は黒いが、裏の戸を一枚
開けると、山の奥は吹雪の白い渦であらう。其の渦
が重り又重る空の、巻いて、渦を巻いて段々奥
深くなる方は、白山よ、大汝よ、御前ヶ嶽よ、劔ヶ
峰よ、石炭のやうな黒雲の中から、すら／＼と研出
した如く、白刃を交へて現れて居るが、山は近いほ
ど、間近なほど、次第に薄雲のどんよりとなつて、
南下りに故郷の町、――海の方は蒼い空。

四

一月元旦くわつぐわんだん、不斷着ふだんぎのまゝ羽子はねを突ついて居ゐた、十二
三さんなのが、二三にんかどくち人門口にんかどくちに立たつた中なかを通とほつて來きた。大おほど
通ほりの商賈あきうどは未まだ一様やうに戸とを鎖とぎして居ゐたが、今いまは早はやや、
兩側じやうがはの家いへの軒のきごと毎ごとに、國旗こくきの翻ひらがへるのが、ちら／＼と
遙はるかに望のぞまれて、車くるまの響ひびきと、人聲ひとこゑと、凡およそ、胸むねに浮うかぶ
ほどの元旦ぐわんだんのものゝ氣勢けはひが廉ひろい空氣くうきを傳つたはつて、一
人雪ひとりゆきの中なかに立たつてゐる耳みみに響ひびいた。

眺ながめて佇たぐずむ、身みの周圍まわりは極きはめて寒さむい宇あらし。嵐あらしが吹ふく
毎ごとに、降ふるとしもない雪ゆきがひら／＼と來きては袂たもとに觸さは
る、爪先つまさきは氷こほりのやう、私わたしは歸かへりかけた。

正月じやうげつはどうこまで、

から／＼山やまの下したまで、

土産みやげは何なんぢや、

梃かやや、勝栗かちくり、蜜柑みかん、柑子かうじ、橘たちばな

・
・
・
・

此時このときいとせめて、あはれな、冴さえた、且かつ細ほそい、
透とほる、幼おきない聲こゑで唄うたふのが山やまの中なかに聞きこえて、木靈こだまに響ひび

く。

耳を澄すと谷の底、それよ、藁屋根に厚い雪を被つた、人の家が、戸を見せ、背戸を見せ、ふつくりした横に長い垣根を見せて五六ある。

あゝ、雪に埋もれた、白い墓の中で唄ふのであらう、其聲は、魔が、捕へて来た兒に唄はせるやうにも聞え、又山姫が、女童に唄はせるやうにも聞え、聖の膝下に新發意が唄ふやうでもあり、継子が唄ふやうでもあり、腕白が喚くやうでもあつた。が、故郷の兒等は皆師走に入つて、半頃から吟ずるので、私はこれを幼い時、戸外で、雪丸げをして體は皆氷のやうになつて、かじかんで、晩方内へ歸ると
(御覽、悪戯が過ぎますから。) と火鉢の上で母親に手をさすられつゝ唄つたのである。

「もう十八になりました。」と思はず俯向
 く……目に入ったのは、雪にさした一把の花。
 水仙、梅の枝など取添へて、之は下から買つて来た。
 丁度、山の裾を流るゝ大川の橋を渡つて、坂の取着
 に来る観音町と云ふのを出脱れる處に、石の地藏雪
 が七體、手手に、珍しく、一束の稻を提げた七ツ
 地藏といふのがある。――今年は國々豊穰だつ
 た、けれども、むかし昔飢饉の時、徒黨を組んで此
 の山巔に推登つて、城内の藩主の寢耳に響くやう、
 一齊に聲を放つて泣いて泣いた。

爲に倉庫は開かれて、幾多の貧民は命を繋いだが、
 重立つた者七人といふのが刑に處せられた、其記念
 なので、地藏堂の傍に花を賣る店がある。其門を出
 て立向ふと、直ぐに此の抱いてあるやうな雪の山。

其の主の婆さんから買つて来た。例年、其の時分
 には未だ何處も市では店を出さぬので、父の代も、
 花は其處で買ふのであつた。蓋し、其の七ツ地藏を

境^{さかひ}として、五六の山家^{やまが}も麓^{ふもと}の小家^{こや}も、郡部^{ぐんぶ}に屬^{ぞく}して、
正月^{しやうげつ}は舊曆^{きうれき}を用^{もち}ふるのであるから、

正月^{しやうげつ}はどうこまで、

から／＼山^{やま}のしたまで。

と又^{また}繰返^{くりかへ}す、芋環^{をたまき}の絲^{いと}の纏^{もつ}れ／＼て、峰^{みね}から谷^{たに}、
一山^{いっさん}を勝^{かッ}つたやうに聞^きえるのに引留^{ひきと}められながら、
斷^たちもやらず、その、黒^{くろ}い渦卷^{うづまき}ある部屋^{へや}、吹雪^{ふぶき}の白^{しろ}
い渦卷^{うづまき}のある奥山^{おくやま}の方^{ほう}を見返^{みかへ}つては、俯向^{うつむ}き／＼引^ひ
返^{かへ}す、．．．．空^{そら}は、下^おりるに従^{したが}つて次第^{しだい}に晴^はれ
て、日^ひの御旗^{みはた}は大き^{おほ}く鮮明^{あざやか}になつた。

麓^{ふもと}で又^{また}、花屋^{はなや}に休^{やす}んだ時^{とき}。

「もう今年^{ことし}あたりから、坊様^{ぼつさま}連^{たち}と一所^{しよ}のお正月^{しやうげつ}にいたしたうござります。」

と婆^{ばあ}さんは言^いつた。而^そして爾^{その}時^{とき}、花屋^{はなや}の背^せ戸^とに迫^{せま}る、山^{やま}續^{つゞ}きの岨^{がけ}を落^おつる、雌^め瀧^{たき}の音^{おと}、雄^を瀧^{たき}の音^{おと}が、二筋^{すぢ}聞^きえた。此^{この}音^{おと}は、市^{まち}と一所^{しよ}に、此^{この}山^{やま}へ正月^{しやうげつ}が來^くるやうになつても聞^きえよう。

【完】